魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

Vergil

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

【Ｎコード】
Ｎ３４８２Ｚ

【作者名】
Ｖｅｒｇｉｌ

【あらすじ】
まあ、死んで転生した。何処でもあるような話だ。
だがな、あんな死に方あるのか。神はどれだけ俺が嫌いなんだ！！
折角。折角出来たのに……色々と運に見放された不幸な転生者の物語です。

プロローグ（前書き）

コメディ、ギャグに初挑戦です。

こういう笑系統のを書いてみたくなりまして。やってしまいました。

デビルメイクライは、技などで出てきます。主に主人公の。

プロローグ

俺は棗涼介。うん問題無い。
年齢は１８歳であってる。
性別は男……うん問題なし。
此処までは良い、此処までは……
次はとても重要、俺は死んで違う世界に転生した転生者らしい（？）
しかも赤ちゃんからだ。

なんでや、なんでこんな事になったんだ。好きな女の子に告白して彼女も出来て、リア充の生活を送り始めて、なんで！　なんでや。

なんでリア充になって１５分後に死ななあかんねん俺は、世の中はそんなにリア充が嫌いなのか？　そうんなだろう。

だからリア充になって、幸せ絶頂期の俺を死に陥れたんだろう。そうなんだよな。

ならなんで俺だけを死なせた。他にもリア充の奴らは居るだろう？
　なんで俺なんだよ。

折角彼女が出来てリア充になれたのに、リア充を満喫したかったのに、なんでや。初リア充になって１５分後に死ぬって、もうギャグやん。ギャグ以外の何者でもないやん。

何で爆発してしななあかんねん。リアル、リア充爆発じゃないか！！

転生した直後は相当荒れた記憶がある。

しかーーーーーし！！！！！　此処が魔法少女リリカルなのはの世界と知って、テンションハイ！！！！！！

なんだが、その事実を知ったのは俺が小学四年生の頃。丁度４年生の頃に海鳴市って所に引っ越してきたんだ。

その名前を聞いて此処が魔法少女リリカルなのはの世界って知ったんだ。その時クラスは違ったが、他のクラスになのは達がいるのを発見したんだが、不思議な事にアリシアだと思われる人物が居た。

更に見たことの無いツンツンヘアーの黒髪でそこそこ格好いい男の子も混ざって居た。背はなのは達より頭一つ分位高いかな、まあ俺ほどじゃないけど。

そんな事よりも俺は目が点になった。それと同時に、この時点でＰ・Ｔ事件も終わっていて、闇の書事件も終わっている事を物語っていた。しかも二つともハッピーエンドで終わった可能性がある。

あの男の子は原作には居なかった。多分俺というイレギュラーが現れたことにより起こった小さな歪みかもしれないし転生者という可能性も捨てきれないがもうどうでもよかった。

当然の事だがこの時点でやる気が失せた。人生に落胆した。

だけど、神は俺を見捨てて居なかった。

俺が小学五年生の時、デバイスを手に入れた。普通なら手に入れた瞬間テンションがｈｉｇｈになるんだが、なれなかった。

だって、山奥の洞窟だ。しかも、此処まで来るのに死ぬような思いもした。更に目の前には見たことのある女の子が俺にデバイスを手渡した。

こうしてしまった経緯が、家族でピクニックに行く。山の探検に出て。遭難。

不幸だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　と全力で叫ぼうかと思った時に、目の前から大きな毛むくじゃらの動物が現れた。

全長は３ｍ位で四足歩行で、全身が茶色の毛で覆われている。

手足には鋭い爪。あれで引っ掻かれたら即死間違いなし。

鋭い牙に強靭な顎。あの顎に噛まれたら俺の二度目の人生終了を告げましたになる。

此処まで言えばなんとなく想像は着くと思うが、クマだ。しかもクマの視線が俺を捉えて動こうとしない。とても怖い、小便漏らしそう。脱糞しそうだよぅ。

いくら精神年齢が２０を超えていても小学五年生の肉体でクマに勝てない。転生する前でも勝てる要素は……無し、一個もないよぉぉぉぉぉぉ！！

俺とクマまでの距離は大体５ｍ弱しかない。

さあどうする俺？　まさにｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ．　俺が思案している間にもクマが近づいてくる。

さあどうする俺？！　回れ右してダッシュか？　それとも死んだふりか？　どっちが良いんだ！！

選択の時だ。どっちがバッドエンドルートなんだ？　逃げるか、死んだふりか。どっちが良いんだ。

それとも戦闘……そのルート死亡フラグが半端じゃないんですけど。ダメだな。

もうヤバイ。こうなったら・・・・・

……死んだふり。君に決めた！！

俺はその場で倒れて死んだフリをした。さあ、クマよ俺をスルーしろ。

コレで万事解決だと良かったんだが、首元の襟をクマが噛んで俺を持ち上げた。その瞬間、俺は恐怖のあまり失禁して気絶した。カッ

コよく言えばブラックアウトと言える。

しかし、直ぐに意識を取り戻した。側頭部に何か固いものがぶつかった様な痛みでだ。それは運ばれている最中に俺の後頭部が木にぶつかった。その痛みで意識が覚醒した。

ああ、俺の二度目の人生にも終止符が打たれたな、せめて原作キャラとは一度で良いから話をしてみたかったな。悲哀感を全身から放出しながらクマに連れ去られていった俺。

そして、洞窟の奥深くに連れていかれたその瞬間、俺は驚愕した。

だって俺の目の前に女の子が居た。しかも見たことがある……高町なのは？　違う。目の色が違う。

するとクマがその女の子の目の前に俺を下ろすと、何処かに消えていった。

彼女はマテリアルズの一人。星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）。ということはリインフォースが生きている可能性は高いな。

そんな事を一瞬のうちに考えていると、彼女が手を差し伸べてくる。その手には、日本刀の形を型取った白銀のネックレスがあった。

俺はそれを手を伸ばして受け取った。彼女は優しい微笑みを見せた。

心臓が高鳴る。ドクンドクンという音がハッキリ聞こえる。心拍数もハネ上がり、顔が赤くなっていっているのが手に取るように分かる。

相手にこの心臓の音が聞こえてないか凄く心配だ。聞こえてたら滅茶苦茶恥ずかしいぞ。

俺は顔をそむけて、彼女に真っ赤になった顔が見られないようにした。丁度その視線の先に彼女の足元が見えた。しかも、ふらついていた。

危ない、俺はそう叫んだ時には体が動いて彼女の体を俺の体で受け止めていた。まだ発育途中のお胸さんが俺の胸板にむにゅうってなった……ｏｈ　ｙｅｓ！！！！！！

だが直ぐ彼女の異変に気が付いた。息が荒く、呼吸が激しい。おでこに手を当ててみると熱いし、しかも頬が赤く火照っている……

これってもしかして……

……発情期！？　マジで、ヤバイじゃん。今から俺に襲えと言いたいのか？　上等！！　襲いまくってやるぜって何を言っているんだ俺は。そんなわけねえじゃん。

俺は彼女をおんぶして、洞窟から抜け出した。俺今、現在進行形で絶賛遭難中、早く父さんと母さんを見つけないと。この子の為でもあるけど、一番は俺の為に。

遭難中の俺は何とか父さんと母さんを見つけて、この子を発見した事情を話した。（クマとの死闘？　は口にしなかった。）親が居ないことやその他もろもろ。
するとさ、俺の予想通り……家の子になった。養子に取ったんだけどね。

ああ、俺の平穏の日々が崩れたかもしれないな。

何でこうなった。

それから約一週間が経ったある日、俺は家でつまらんＴＶ番組を見ていた。

ガシャン！　という物音が二階から聞こえた。

「おいおい、マジかよ。こんな時間帯から幽霊が出たとかいうなよ、俺チキンだから幽霊とか全くダメなんだよな。ああ、幽霊とかマジで勘弁してくれよ。小便漏らしそうだよ。」

メッチャ棒読み。

「ああ、怖いよ。ちびるよ～。」

棒読み。

「父さ～ん。母さ～ん。早く帰ってきてよ。」

ガチャンっとリビングの扉が開く音が聞こえた。首を後ろに回して見ると……美少女だと？　美少女の幽霊だと。キャッホーウ！！美！　少！　女！　イエーイ

御ふざけは此処までにしておこう。

「もう、大丈夫なのか？」

「お陰様で、大丈夫です。」

凛とした透き通るような綺麗な声。

「そうか、それは良かった。」

「……」

「……」

会話が続かん。ちょいっとばかり気まずい空気だな。

きゅるるるる～～～っという可愛い音が聞こえた。しかも、彼女の方からだ。

もう一度後ろを振り向くと、全身をプルプル震わせていて、耳まで真っ赤になった顔を下に向けていて、両手でお腹を押さえていた。

正直に言おう。メッチャクチャ可愛い。お兄さんの心臓鷲掴みにされちゃったよ。

まるで、小動物を見ているような感覚だ。撫でたい、愛でたい、ペロペロしたい、お持ち帰りぃぃぃ！！！！！

ハッ！！　危ない危ない、もう少しで理性が崩壊するところだった。何とか踏みとどまった――――――パンツ一丁で……アウトォォォ！

俺完全にスリーアウトチェンジィィ！！

ヤバシ、このままだと。変態という名の紳士から変態という名の変態に成り下がってしまう。なんとか戦況を打破しなくては……気のせいか？　あの子から熱烈な視線を感じるのだが？　視線を向けてみた。

顔を両手で覆っている。うん大丈夫――――

「なわけあるかぁぁぁ！！」

ビクッと体を震わせたのが伝わってくるが、関係ねぇ。ガン見じゃん、メッチャガン見じゃん。両手で覆っているのに関わらず、大きな隙間があるじゃん。指と指の間の隙間空きすぎじゃんか！！　意味ねえじゃんかよぉぉ。

するとまた、きゅるるるる～っという音が聞こえた。

「ハハハハハハ！！」

俺はもう腹を抱えて爆笑するしかない。ああもう可愛い。

必死にお腹の虫の音を隠そうと顔を左右に震わせる。何この可愛い生き物は？　ぐへへへへお兄ちゃんが美味しく食べてあげまちゅよ。

台所に行き、包丁を取り出した。

「何が食べたい。」

包丁を片手に包丁に聞いてみる。

「……」

返事が無い。只の包丁のようだ。

変な空気が流れる。Ｏｈツッコミ無か、そうかそうか。なら、ツッコミをしてくれるまで俺はボケるぞ。それでも良いのか、美少女。

「な、なんでやねん？」

疑問文＋可愛く首を傾げる＝グハッ！！。

「グハ！！」

口から大量の血を吐き出して倒れるイケメン。駆け足で俺の傍まで来てくれる美少女、最後の俺を看取ってくれるのか。それはありがたい。

左手で俺の後頭部に手を差し入れて、頭を起こしてくれる。

目には涙を溜めている。そうか、こんな俺が死ぬことを悲しんでくれるのか。

「……」

何を言ってるんだ。

「はよ、飯作れ。」

ハッキリと聞こえた。

「死にかけの俺にそれは無いっしょ。」

我が生涯に一片の悔い無し。ガクッ。

それから、数年後。俺は中二になった。

これで、いくら厨二発言しても大丈ブイ！！！　一応俺はなのは達が通う中学と一緒だ。しかし、あの美少女は違う中学に通ってもらうことになった。

その時に猛反発を喰らったが、高校は一緒の所を通うという事で決着はついた。

後は此奴の学力なんだが、ハッキリ言おうか。学校行く必要なくね！　それが俺の回答だ。

頭良過ぎ、適当に中学レベルの問題（まだ、俺が四年生の頃）出してみたんだが、全問正解。試しに高校レベルの問題も出したが、殆ど全問正解。

そのままの勢いで大学の問題集を買って、試したところ7割以上はあってた。モーマンタイ。

そして、名前の方だが、父さんと母さんが斬新すぐる名前を出すせいで三日三晩もかかってしまった。

父さんは、来栖星（星と書いてスターと読むらしい。）どこぞの「はがない」に出てくるペガサスさんだとツッコミたくなったが、我慢我慢。

母さん、これは流石にツッコまずには居れなかったよ、来栖流星と書いて（スターダストと読むらしい。）アウトォォォォオオ！！

それ完全にアウトォォォォオ！！

それで、俺の出した案で妥協してくれた。いや、マジで良かった。

来栖星香（くるすせいか）と読む。正直に言って、これが一番妥当でしょう。上二つは父さんと母さんが出した案でも比較的にマシな方だ。あれでも。

あ、俺？　今の俺の名前はメッチャ斬新すぐる――――――――――父さん母さん、この恨み死んでも許さないからな。

来栖一馬。何となく予想は付くと思うけど、これ「かずま」って読むんじゃなくて……「ユニコーン」って読むんだ。

穴があるなら穴に入りたい。いっそ殺してくれ。

プロローグ（後書き）

ギャグ、コメディを書く上でこうした方が良いというのがありましたら、ご教授お願いします。

ギャグ、コメディ系統は不得手ですので、よろしくお願いします。

第二話　クラス（前書き）

基本的に一話一話短いです。

第二話　クラス

新学期。

学校に着いてすぐに掲示板にダッシュ。今日から中学二年生、新クラスの仲間たちを拝見しにいかなければならない。

ある意味、学校の中で一位。二位を争うイベントだ。

まあ、拝見って言っても組を確認するだけだ。何故って？　そりゃ学校でも居眠りｏｒ保健室でサボッテばかりの常習犯の俺にはクラスに誰が居ようと関係ない。

誰にも俺のジャスティスに触れることは出来ない。

という事で、新しいクラスに行きますか――――――主に寝る為に……

その時、彼はシッカリと確認していないのが仇となった。

なぜなら、そのクラスには。

高町なのは。

フェイト＝テスタロッサ。

アリシア＝テスタロッサ。

八神はやて。

アリサ＝バニングス。

月村すずか。

の名前があることに、気づいていなかった。彼がある意味一番絡みたくて、絡みたくない者の名前が全員揃っていることに……。

何時もの俺なら、なのは達＋イレギュラーのクラスを確認していた筈なのに、今となって悔やまれる。確認しなかった事に。マジでミスったわマジで。

イレギュラーの存在。

風間恭仁、彼の名前もあった。

俺のクラスは1組。これで、8年連続1クラスだ。

「俺の席は……あそこか。」

早速カバンを枕代わりにして、

「お休み。」

寝た。その速さにのび太もビックリ。正にのび太に匹敵するほどの速度であった。

一度だけ、なのは達の内、なのはとバーニングとはやてと一緒にな

った事がある。それは去年の話だ。
なのはとバーニングがメッチャ絡んでウザ可愛かった。くぎゅぅ～の声はツボに入る、ゆかり姫の声も良い。

いっつも居眠りしてくる俺に、なのはとバーニングが突っかかってくる。なのはの命令には直ぐに従います。なぜか？　怖いからだ。
去年、なのはを無視し続けたら何処からかクナイが飛んできて俺の額に刺さった。その次の瞬間に、強烈な殺気が俺だけに放たれた。
あんな殺気を浴びたのは初めてだ。死を覚悟したよ、「俺のなのはに迷惑をかけるな！！！！！」っていうシスコンバリバリの思念がハッキリ聞こえたからな。おお、怖い怖い。

バーニングとは、何時も喧嘩だな。

何時殴り合いに発展してもおかしくなかった。なりそうな所で、隣のクラスからバーニングの嫁（？）が飛んできて、止めに入ってくれた。

まあ、なんでバーニングが俺に突っかかる理由は分かっているけど、テストでも負けるのは嫌なんでな。こんなんでも、一応俺は全教科毎回満点で、校内一位で常に二位にバーニングが居る状況だからな。
ｈａｈａｈａｈａｈａｈａ.

はやてとは、話が合うから、彼奴となら同じクラスでも良いかな。

何の話って、そりゃあはやてと言えば……おっぱいしか無いっしょ。
はやてこそおっぱいの聖書だ。
あやつ、此処に通う女子全員のバストのサイズを網羅してやがった。
さいっこうにｃｒａｚｙだ。

今年ぐらいは最高の中学校生活が送れますように……。
その願いも儚く散っていた。しかも、魔導師組揃っているという最悪のクラスで……。

さあ、今日の帰りに翠屋に寄って帰るか。

ＨＲが終わる。１０分間の休憩時間。
誰かが俺を揺すっている……誰だ？　……なんでなのはが居る？？？？？　それより、早く起きなければ殺されてしまう。うん？　他にも沢山の気配を感じるぞ。

目を開けて周りを見渡すと。

Ｏｈ！！　なのは達勢ぞろいで俺の席に集まっていやがる。何て嫌がらせだ！！

ｇｏｏｄ－ｂｙ俺の中学二年生生活。

「何、俺の中学二年生生活が終わりを告げたっていう顔をしてるのよ。」

凄いな、俺の心を読むなんて。

「今、私の事。バカにしたでしょう？」

「ソンナコトアリマセンヨ。バーニング。」

「だから、バニングス！！　いい加減名前ぐらい覚えなさいよ。」

「無理だ。」

「何で、即答なのよ！！」

プンプンっと怒りを露わにしている。カルシウムとれ、または牛乳飲めよ。

「まあまあ、アリサちゃん。落ち着いてよ。」

そこで、バーニングの嫁（俺が勝手に決めつけている）がバーニングを宥めている。そのお陰か少しは興奮が落ち着いたようだ……流石、嫁（？）

「だから、私はアリサちゃんの嫁じゃないってば。」

スマンスマン、知らぬ間に俺の思考が漏れていたようだ。

「一馬（ユニコーン）君のせいで、私に同性愛者っていう噂が流れてるんだからね。」

「頼むから、その名前で呼ばないでくれ。一馬（ユニコーン）だなんて、我が生涯の恥だ。」

バーニングが嫌な笑みを浮かべやがった。

「ねえ、一馬（ユニコーン）。」

「グハッ！！」

吐血！！

「一馬（ユニコーン）ってば」

甘えるような甘い声で名前を呼びやがった。

「ゴパッ！！！！！！」

お口から血がドーン！！　死ぬ。頼むからその名前で呼ばないでくれ。

「ユ・ニ・コ・ー・ン」

「ンゴパ！！！！！！！！！！！！！！！！」

耳元で甘く囁きやがった。畜生！！！！！　くぎゅぅ～の声で甘く囁かれたら、死ぬしかねえじゃん。

「我が生涯一片の悔い無し。」

そして、俺は三度目の死を迎えた。

その頃外野は、

「ねえ、なのは。」

「うん？　どうしたのフェイトちゃん？」

「私たちの入る隙が無いね。」

「にゃははは。」

苦笑いをするなのは。

「はやて、この三人っていつもこうなの？」

「そうやで、アリシアちゃん。」

「一馬（ユニコーン）って面白いね。」

一馬（ユニコーン）には、効果は抜群だ。

「くっそ、誰だか知らねえが。俺のなのは達と仲良くしやがって、コロス。」

風間恭仁が、一馬（ユニコーン）の方を見ながらドスグロイオーラを放ちながらブツブツとつぶやいていた。

第二話　クラス（後書き）

こんな感じで、ほのぼのと行きます。

戦闘は極力少なめで行きます。

来栖星香の登場を楽しみにしている方々、もう少しお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3482z/

魔法少女リリカルなのは〜運に見放された転生者〜

2011年12月12日00時54分発行